



「うう、ちょっと、何すれば、いいんですか……」

「あ〇いちゃん可愛いのに凄いいねえ……
こんな大の大人でも大変な山に登るなんて……ああ、可愛いなあ」

「は、はあ（き）、気持ち悪いなあ、あんまり近うかないですよ（お）」

「ほら、おじさんたちちょっと欲求不満だね。登山も好きだけど、夜は夜で楽しみたいんだ」

「よ、欲求不満って……？ わたし、何すればいいんですか」

「まあまあそんなに焦らないで、ほら、寒くて縮こまっちゃってるけど、可愛いから」

「か、可愛いって……な、なにを」

「……ほらっ」

「……えっ、あ……」

「え、えっと、な、何……、何、出してるとはですか……」

「な……、ナニだよナニ。あ○いちちゃんにもよ……っただけ」

「……っさ……り……まわ……して……欲……し……い……ん……た……よ……ね。……そ……の……お……手……手……で……わ」

「……っさ……り……ま……わ……し……て……欲……し……い……ん……た……よ……ね。……そ……の……お……手……手……で……わ。……無……理……だ……す。……無……理……だ……す。……」

「嫌ならいいんだけど、この寒空の中、お友達と一緒に出ていくかい？」

「この天候じゃ、君らくらいの女の子なんて10分と耐えられないと思っけよ」

「……で、でもあの、なんにもそのわからないというか、知らないというか」

「大丈夫。おじさんが優しく教えてあげるからさ。ほら、早く触ってみて……ほらほら」

ちゅ……カキカキカキ

「きゃっ……えっ、ひやあん……」

「あめあつ……ららよっ、あめあつちゃん、ほら、じつなり、既手とびっ……」

「いや、なにが「うち」飛んで、き、汚いよっ……やめてくださいっ……」

「止めて……っ、もう飛んじゃったもんはじょつがならでじよ。でもちよっとうん持ちはなつた」

「うう、へとへとしてる……嫌だあ。もう、満足ですよな。か、開放してください」

「これで終わりなわけないだろ!? なんもわかってないんだなあ」

「あ○いちゃんは……ほら、もうちよっただけ付き合ってもらっつよ」

「……怖いよ。助けて……」

「ううう、わたしたち、登山にきただけなのに、
なんでこんなことしないといけないのよう」

「うう、気持ち悪いの、わたしに押し付けならどへんたへんら……」

「おお、じっさり脱いだね。なまねるかはまっ、わかってるんだよねっ。
ほら、おじさんも優しくするから、力抜らして」

「うう、怖いよお、みんなあ、お母さん……」

「うん、ちっほりほりほりめてかな、びっちちちでいんせいな。
ん、くっ、お、ううう、お……お……お……」

「あ……うう、ちっちとそんな強引に……ん、ううう」



ビュルルルル、ドビュルルル

「あ、あぁーっ……くぅううう……熱い、あひるるる」

ビュルッビュルル

「……あーっ、気持ちさらさら。おぼろおぼろ」

「ううあああ、さらさらおぼろおぼろ……」

「汚い」となっていない。元々「は汚ら」と「ら」なんだが「は」

「うう、ひびきよ、なんで「ん」な……」

「あ〇ちゃんありがとう。よし、「わ」か
「お」さん「精」カヲ女暖めあつて「な」

「嫌あ……もじもじ……」

「うっ、うぶっ、ぐらっ……ぶっえ！ や、やめ……っ……！」

「おらっ、もっとしっかり舌動かさねえか……！
しっかり掃除しろ！ 嫌がつてんじゃねえ」

「うう、汚いし、ぐざいい……！ やめ、やめてよう……！
ひどいよ。おじさんたち、ふざけないでよお」

「うるせえ、こちとら溜まってるんだ。
てめえみてえなメスガキで我慢してやるんだから、ありがたく思え」

「あ、あたしには関係な……っ……うぶっ」

「うっっっ、ぐざっ。うぶっ、うぶっ」



じゅぶっじゅぶっれる……

「よーしそうだ、いいぞ。やればできるじゃねえか。その反抗的な顔がなければもっとういんだがな」

「(うっ、臭い、女の子の口にこんなもの突っ込むなんて、どうかしてるよ、絶対……)」

「おい、なんだ、言いたいことあるなら言ってみろよ！ ポコられてえのか？ ああ？」

「……んっん、……うっ、んっん、れる」

「最初から素直に言う」と聞いてりゃいいんだよ小娘が……」

「(うっ、最悪……はやく、はなしてよお)」



「うっ、そろそろっ……ひいた、出すぞっ……しっかり飲めよ……」

「んぐ、んうう、えっ……だ、出すって」

びゅびゅ、いじゅるる

「んんんんん……ん……ん……」

「おらっ、口からはなすな……全部受け止める……」



「んう……ぶうえっ……」ほっげほっ、うええ」

「ちっ、全部飲めなかったか……まあいい、ほら、カラダこっち向ける、可愛がってやっから」

「うう……も、もう、嫌だよ、助けて」

「えっ？ 終わるんなら、は、早く抜い……」

下「ブルブルルルル、下「おお

「ああああ……！ ちょっと、抜いて抜いてえ……！
膣内で、ナカで出てるよおっ……！」

「うーっ、くっ……！ 全部注ぎ込んでやるっ…… ひ○たっ」

「うああああん……！ やめて、やめてええええ！ 離して、離してえええ」

「はあっ、はあ……ふっふっふ」。貧相なカラダでも

「人前に『女』してたじゃねえか」

「うっええ。最悪……信じらんない……ホント」

「おら、まだまだこんなもんじゃねえ、夜は
長いんだ。まだ晴れねえしな……よし、暴れんなよ……」



「ざ、寒い……ちょっと、服ぐらい、返して、返してください。お願いだから」

「今から暖めてやるから待ってる。おま○「おっぴろげちまってまあ……」

「……も、もう嫌あ。さっき出したでしょ。外してよ。「これ外して……」

「お前みたいな生意気なガキはしっかり調教してやらねえとな。山の厳しさを叩き込んでやる」

「や、山関係ないし……頭、おかしいんじゃないの」

「お仲間も楽しそうにしてるんだから……」
「一緒に楽しもうぜ」



「ほら……よっ……」

ニチャアア ニュルル、ヌプウウッッ

「ああ……ああああ……」

「うっっっっ……おおうっ……おら……もっとっっかり足絡ませねえか……」

「おなか、気持ち悪いっ……」

「結構、こなれてきたじゃねえか。これはこれで、いい感じだぞ」

「も、もうっっ、許してよ……。はやく、抜いて、中には、出さないでえ」

「うるせえ、寒がってただろうが、俺の精液であったためやるっっの……」



「ううっ！ やめ、やめてええええ」

ピュル、ピュルルル、ピュル

「あああああ！ ああぐくうっ」

「おお、そんなに啞え込むなって、心配しなくても全部注いでやっから」

「そんな心配、してないいいっ！！ 抜いて、抜いてっ！！ これも外してよおっ！！」

「……ふうう！ 最初はこんなクソ生意気なガキあてられて
がっかりだったが、中々いい感じに発散できたな」

「夜は長いんだ。しばらくそのまんまにいる。他のヤツが相手してくれるかもしれないからね」

「うえええん、うえええ……もう、もおお」



「……はっ、はあっ」

「うん、もうちょっと強くしても大丈夫だから、
しっかり、しっかり挟んで、ほら」

「ひどい、あなたたち……いい年して、私たちを、なんだと思ってるの……」

ヌルッヌルッきゅん

「あっ……ん、はあ、はあ、くっ」

「まあまあ、小屋に入れてやってるんだから、
その代わりとして少しくらい楽しませてくれても、さっさと」

「……最低よ。山に下したら、覚えてなさいよ……」



ヌチャツヌルツ……ヌリア

「ひっ、ちよっ、き、汚いっ」

「知ってる？ これは男のカ○パーっていうんだよ。
か○でさんのおっぱいに垂れて、エッチだねえ」

「ん、べたべたして、汚いっ……それ何の臭さ……」

「これだけじゃ、もの足りないでしょ？ 安心して、
もっとがっつり、ぶっかけてあげるから……」

「えっ、かけるって、まさか……その」

「やっぱり年長者なだけあって知ってるかな？ ほら、らへち」



「いせし……あ、かはし、きし……」

又チユツジユツジユツ

「ふあっ、ああああ……もうちょっと、ゆ、ゆっく、り、お、おねが……」

「か〇でさん、いいねえ。やっぱり下から見ると、魅力的だよお。おじさんの上に乗っかったらいいなあ」

「……」

「あなたが、乗せたんでしょ……くぶらっ……」

「おっぱいぶるんぶるん揺らしちゃってまあ……あー、気持ちいいなあ……」

「ぶらっ……くっ、うらうら。私、はじめて、なの……ん……」



「くぅっ、うく………てくださら」

「ん？ 何、なんて？」

「私が、がん、がんばるから、みんなには、何も、しないでくださいっ」

「え……俺の仲間ももうお楽しみ中みたいだし……そんな今さら」

「今からでも…… もうみんなに乱暴、しないで……止めてあげてっ」

「か〇でさん一人で男4人を相手に？ ちょっと厳しいんじゃないかな？
まあ実際みんなはか〇でさん狙ってたみたいだけどねえ」

じゅぶっじゅぶっじゅぶ

「いいおっぱいしてるし、なんかS〇X気持ちよさそうなカラダ
してるもんなあ。ほら、おじさんもう限界。おしゃべりはいいからっ」

ビュ、ビュビュビュルル、ドロオ

「うっっっ……あ……ああ……かっ……っ……っ……突き上げられてっ……っ……っ……」

「か〇でさあん！ しっかり、子宮の奥に、注ぐから、妊娠するんだぞっ！ おっ、おおうっっ」

「うっっっ、臍内に、出さないで、ほしかったのだから……やめて、ほしかったのよ」

「ふ……っ、ふっっ……ちょっと、疲れたかな、休憩」

「は、早く、抜いてください。もう、いいでしょう？ みんなも、休ませてあげてくださいら……」



「だーめ、こういうのは余韻が大事なんだから、
処女だったか○でさんは知らないかもしれないけどねえ」

「だって、はやく、抜かないと、抜かないと！ー！ 妊娠、妊娠しちゃうー！ は、はなしてよっ」

「おじさんの子供を身」もってから、一緒に仲良く下山しようよ」

「もっっ……もおお、最低、らら加減、っつたわら……」

「か○でさんのお仲間もみくんを楽しそうにしてるんだから、
おじさんとの思い出も、まだまだこれからだよ」

「あだし、こんなおじさんとの子供なんて、欲しくない……絶対欲しく、ないよ……」

「しっかり、あつたまるうね。下手すると、死んじゃうからね、山は」

「あぐっ、えぐっ……うんうん」

「か〇でさーん、あつたかいねえ。気持ちいいねえ」

「うっ、みんなの、い、痛くて、気持ち悪い、だけ」

「うーん、じゃあこう考えようよ。今外が吹雪いてて、このままじゃ凍死しちゃうから、愛しい人とカラダを暖めあってるって話」

「ど、ど」に、愛しい人が、いるの……ただの頭のおかしい、おじさんばかり、じゃないっ」

「失礼な言い方だなあ。そんな反抗的なか〇でさんには、お任せください」

「えうっ、うぐっ…… そんな、後ろから、お、押し付けて……」



びゅん、びゅん、びゅん

「えっ、えっ……また、なか、膣内……」

「りやもう、まじもんの妊娠確定だなあ。おめでとう。か〇さん」

「うっ、うっ……き、きたないら。うっ、みんな、ムシ、わ、私が、助けてあげないと、いけなかったの……」

「あらら、年長者だったのに弱気だなあ。最初見たときはちよっとキリッとしてたのにねえ」

「(なにが、いけなかったんだろ……)「んな山小屋で、こなければ、こんなことには、でせ(せ)」

「ふう、よし、もう出ないな。おじさんの精液カマッカマッたなるまで注いであげたからね」



ヌポツ……ヌチャマア

「んっ……んあっっー」

「おおっ、俺「ん」が出したのか……かなオマの
おま○「から、すっくあふれてくるぞ」

「……」

「おしりぶるぶる震わせちゃってまあ。
また勃起してきちゃやうじゃないか」

「……うへ、もう、勝手に、っっっ」

「言われなくても、山を降りる「ん」はオマのクン○チ○を
してあげるから、覚悟してよわ」

「「んな」と「なる」のなら、や、や、山、ん、
死んじやったほっが、よかつたよ。本「ん」の……みんな



「どうぶつ……」○なちゃん、だっけ、おじさんと一緒に、楽しいよ、しよおねえ」

「(うううう……なんなんですかこのおじさん、気持ち悪いです……)」

「あの、言つ」と聞けつて言われましたけど、な、なにを」

「可愛いなあ。可愛いなあ。ほっぺたもぶぶぶぶしてると、

髪もキレイだし、すっごくいいニオイだよお」

「ひっ……ちょっと、それ以上っ、近づかないでください」

「んもう、ちょっと顔近づけただけでこれかあ。

でも、生娘らしくて、おじさん興奮してきちゃったなあ」

びよっ、ニムルウ

「え……これって、らっ……ひっ……イヤァ……」

「んほおー、いい反応だよお。おじさんのおち○ちんもびくんびくんしちゃうなあ〜」

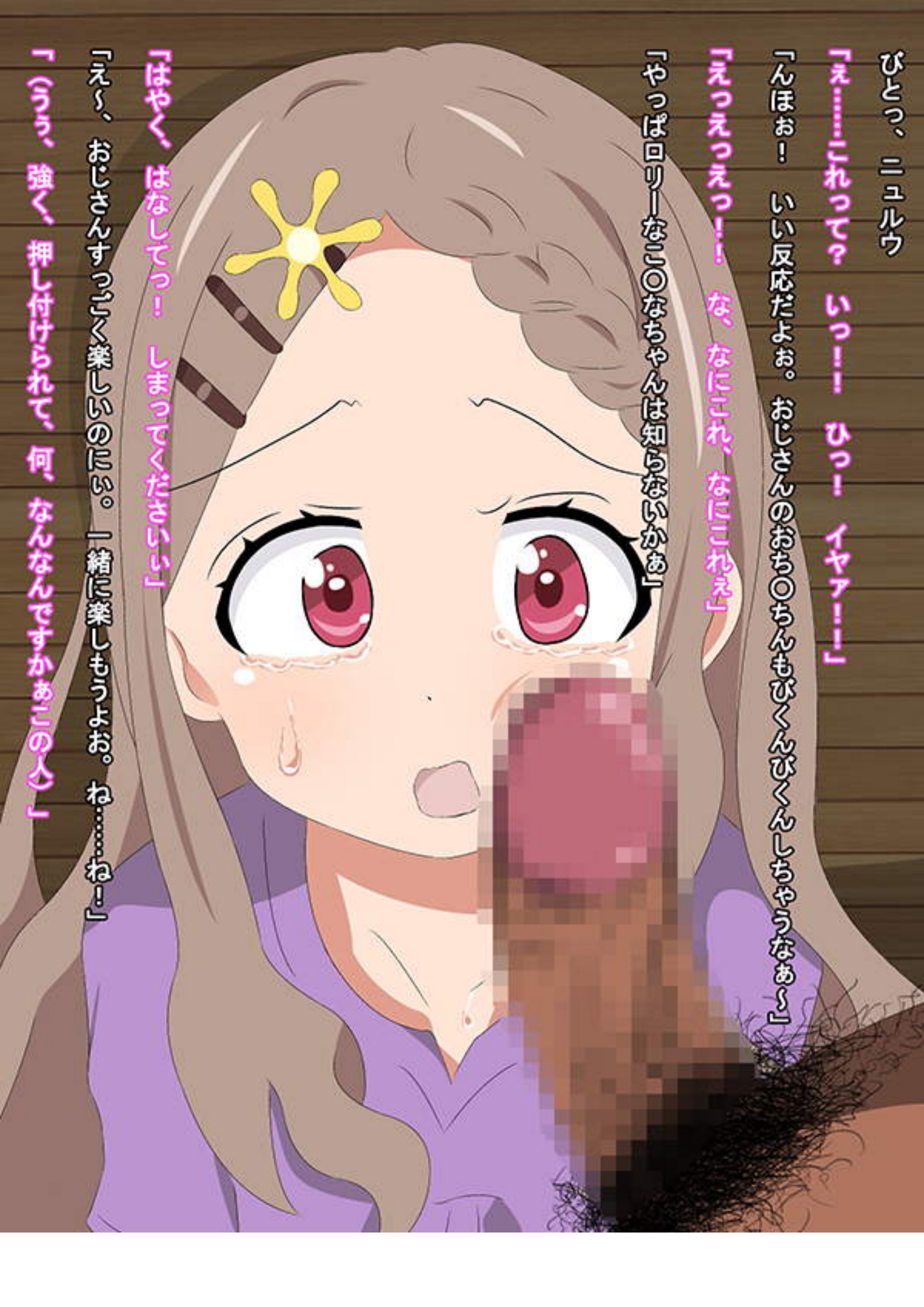
「えっえっえっ……！ な、なにこれ、なにこれえ」

「やっぱりロリーな○なちゃんは知らならかあ」

「はやく、はなしてっ……しまっってくださいっ」

「えっ、おじさんすっくく楽じらのら。一緒に楽しもうよお。ね……ね……ね……」

「(んっ、強く、押し付けられて、何、なんなんですかあこの人)」



「うっうえ、変な、こおい……」

「そんなこと言わないでよお。んふふ。
ここのちゃんのほっぺも、おんなし匂いになるんだからね」

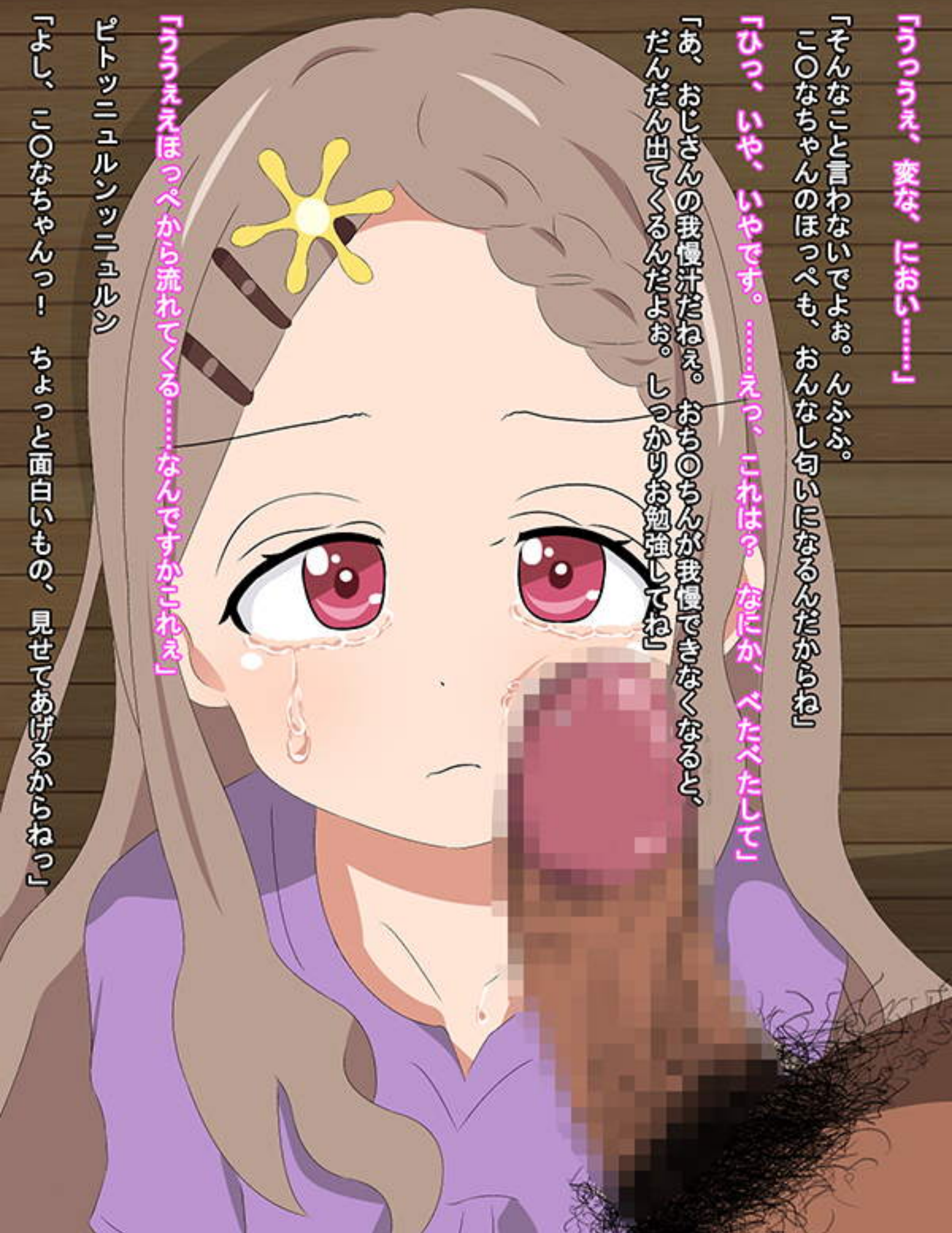
「ひっ、いや、いやです。……えっ、これは？ なにか、べたべたして」

「あ、おじさんの我慢汁だねえ。おち○ちんが我慢できなくなると、
だんだん出てくるんだよお。しっかりお勉強してね」

「うっうえほっぺから流れてくる……なんですかこれえ」

「トッパルンッパルンッパルン」

「あ、ここのちゃんの…… ちょっと画面の、見せてあげるからさっ」



ピチッピュルルッピチチッ

「ひゃあー えっえっ！ ちょっと、やめてー！ くださいっ……」

「おおっー！ おうふー！ んん、いいよお、ああ」

「やー やん！ 何コレ……なんですかこの、虫の」

「（うえ、なんか、嗅いだことのないニオイ……すっごくぐとぐととしてて、変な感じ）」

「それはおじさんの精液っていつてね。赤ちゃんを作るために必要な液体なんだよお」

「えっ、赤ちゃんって、これが……」

「よし、じゃ、二〇なちゃん、もうちょっと勉強してみようか、味を、教えてあげるからよ」

「えっと、う、嘘ですよ。こ、これを、私が、舐めるんですか……？」

「うんうん！ 飲み込みがはやくてえらいぞ？ 女の子なら必ずやる儀式みたいなものだからね」

「う、いやです……！ こんな、男の人の、汚いとこを、その、な、舐めるなんて……！」

「「ちやちや言わない。ほらあ、」○なちゃんのをせらべ、
僕のおち○ちんバッキバキなんだからさ、ほら、ほらほら」

「う……「わいよ……汚いよ……みなさんも、こんなの舐めたりしてるんでしょっか……」

「そりゃそうだよ。彼女たちは年上だろ？ ほら、みんなに追いつけるように、頑張って」



「じゅん……れる、ぴちや」

「あ〜〜〜 可愛いなあ、もう… ちっちゃい歯入るって吐しちゃって、」

「おえ〜〜〜く〜くさい、し、汚い……なんかちよこ田……」

「ちよつとち〇カス溜まっちゃってるから、しっかりお掃除してね？
「これから〇〇なちゃんと一緒に遊ぶ友達みたいなものだからね」

「え、うえっ！ こんなの、舐めなきゃいけないんで、し、信じられない……です。まだ、ですが」

「そつそつ… ほら、しっかり手も使って…！ いろいろお…
タマタマからおじさんのが、あがってきたよおっ！」

ズンッー ギチチ

「あぎっ……えっえっ！いい、痛い痛いいいっ！
な、なに、なにするのぉ？」

「あれ、「Oなちゃんやっぱりちっちゃいなあ。
やっぱちよっと早かったかなあ。えへへ」

ギチチチ、ギチチチ

「ひっひっ……か、はあっ……痛い、本当に、痛いです」

「あっあがっが……く……くっっっーっは、やめ、やめっ」

「……」 「んなまんかな、じゃ、野へん」



又フツ又フツ又フツ

「あっあっあっあっ！何、なにこれ……？
おなかの奥に、**★**きてますうっ！」

「○○なちゃん……」○○なちゃん、さっしやくて、可愛らよ。

おま○「キツキツだけど、気持ちさらさらよおっ。」

「○○なちゃんも、ちょっと気持ちさらさらしよ」**「マッ」**

「そんなこと、お、思っ、て、ま、せんっ……」

「**こ**んなおじさん、**気**持ち悪い、**だ**けです」

「あ、言ったなあ？**ド**ウフ、おじさん、**許**さなはらぞは」



「ニホル、ツンツン、ツンツン、ツンツン」

「あ、たまらん、きもちよかったあああ」

「うっ、ひっく、ひっく、私の、大事な「」が……
熱い、熱いの……きたくないよ」

「「んちんちんちんちん」のおま○」の中から精液があふれてるなんて……
忘れずに写真に収めとかなくちやね……」

ジーンツカシヤツカシヤ

「風景なんかよりすっくいら写真がとれたぞお。」

「○なちゃん。ありがとう」

「うっ、うっ、うっ」

「まだ外は吹雪が……もう2、3日、」精にいられるかも、しれないね」

「……誰か、たすけて、ください」

